

別紙解答用紙に解答すること。

問 あなたは文学部でどのようなことを学び、そこで得た人文学の知識や考え方を将来どのように活かしたいと考えていますか。以下の文章を参考にして、自身の考えを800～1000字で述べなさい。

知の対話へ、いまこそ読書 大澤聡さん（批評家）

本を読むことで教養を形成するという価値観は、近代だからこそ成り立っていたのかもしれない。インターネットによってあらゆるものが可視化された現代では、世界は無限に広がっていて、全てを把握するなんて無理だと事前にわかってしまっています。しかし手に入る情報が限られていた時代には、必読リストを読破すれば世界の全てがわかるはずと思い込みました。冊数が限られ、頑張ればゴールまで行けそうな気がするからこそ挑む気になれたのでしょうか。本には目次があります。1章、2章と番号を振って情報に序列を付け、スタートからゴールまで一直線に構築された体系性があります。前へ前へ、より高く、と駆り立てるその構造は、人格を高めたい、賢くなりたいという「教養主義」の上昇欲に合致していました。

一方、目次のないネットの世界はすべてがバラバラで、序列も体系もあいまいです。情報が無限にあってゴールが見えないため目指そうともしなくなります。そもそも、誰もが共有すべき知識や価値観があるという考え方は、権威を崩してみんな対等だとみなす20世紀後半からのポストモダンの時代に、力を失いました。多様性が重視される時代を背景に「この本は読んで当たり前」という同調圧力は働きにくくなり、教養は雑学や趣味のようなものに変わってきています。

気になるのは、多様化の中でむしろ権威主義化が進んでいることです。専門の島宇宙それぞれに小さな王様がいて、よその島から口を出すなどという雰囲気がある。これでは全体の見取り図は描けません。教養主義が内包する「他者を知りたい」という知的欲求は手放すべきではないでしょう。いま必要なのは島と島をつなぐ対話的教養です。自分の島の知を元手に、他の島の知への推測を働かせ、共通点を探る。そんな「比喩」や「要約」の力を磨くことが大切になります。

動画や音声メディアにもためになる教養コンテンツがたくさんあります。本を読んでみようと思わせる動機付けにも使えます。ただ、情報は断片的だし、話し言葉は感情が優先される。論理的整合性や体系性では文字に勝てません。感情で論理を埋め合わせるのは危ういと思うのです。映画やラジオが戦争に利用されたのは、考えるな、感じろということ。読書には時間がかかる。でもそれは人を冷静に考えさせる時間ともいえるのです。

「純粋さ競争」、形を変えて 高田里恵子さん（ドイツ文学研究者）

「教養があるね」は褒め言葉の半面、ある種の揶揄（やゆ）を含んだ言い回しです。インテリ気取りで嫌みをまとった「教養」のイメージは実は日本特有のもので、始まったのは大正期です。教養を私は「自分自身で自分自身を作りあげること」と定義しています。明治期の青年にとっては、新国家の普請と自己形成は不可分でした。日露戦争前後に近代国家がひとまず完成し、対外的危機が遠のいたことで、新たに自己を満たすものが必要とされます。そうして生まれたのが大正期の「教養主義」です。その大きな特徴は、立身出世主義への反動です。

高踏的な文学や芸術の趣味、授業エスケープや飲酒などの露悪的な反抗心、受験勉強への軽侮、進歩的な政治メンタリティー、変人への包摂力……。旧制高校と旧制中学を覆ったこうした文化は、戦後も伝統校に長らく残存していました。教養主義とはいわば、男の子たちによる「自分はどれだけ純粋か」競争です。前途洋々のエリートの卵たちが、あえて立身出世に背を向け、自分が単なる受験秀才や優等生ではないことを自分にも他人にも示す。見栄や背伸びとも結びついたこの不思議な志向が、日本的教養主義の土台でした。

ではなぜ、この競争の主体は「男の子」だったのか。利益にならないものを好んで身に付けようという精神的・金銭的・時間的余裕のある人は、少数の特権的な男子に限られていました。結局のところ、彼らの芸術や文学への没入も、反抗も、すべて身を滅ぼさない限度をわきまえたもので、甘さと甘えを抱えていたことは否めません。

教養や教養主義の衰退とは、それらが少数の特権的地位にいる人たちのものではなくなり、「脱・優等生戦略」としての役割を終えたことを意味します。昨今の高学歴の若者は背伸びをしなくなったし、単純に、教養を追い求める余裕を多くの人が失っているという側面もあると思います。とはいえ、教養が完全に死んでしまったわけではない。その手段や対象は、かつては文学や哲学、芸術でしたが、現代ではボランティア活動とか田舎暮らしに変わっているのかもしれない。それらをあえて選んで実践するには、やはり余裕が必要です。教養の対義語は以前は「立身出世」。そして今は「コスパ」「タイパ」なのでしょう。自己形成と純粋さ競争という教養の根本がある限り、それはなお続いているのです。

両面印刷

2026年度 社会人入学試験	学部 文学部	試験科目 小論文
-------------------	-----------	-------------

格差を埋める、偶然求めて 福間良明さん（歴史社会学者）

日本の戦後史を丁寧にみると、読書で人格を磨こうとする「教養主義」が学歴エリートの占有物ではなかった事実が見えてきます。格差と貧困のもとで高校にも進めなかった多くの勤労青年たちが、読書を通じて知に触れていたのです。

その歴史に私が出会ったのは今から20年近く前でした。古書店で、人生雑誌と呼ばれていた雑誌の復刻版を入手したのです。1950年代を中心に読まれていたもので、読者の多くは中卒で働く青年でした。文学や歴史、哲学、思想にかかわる記事が載り、読者の投稿や作文もありました。そこでは、貧しさゆえに上の学校に進めないことへの鬱屈（うつくつ）が語られていました。金のある家に生まれた人は進学できるのに自分はできない。そうしたやり場のない怒りゆえに読者は、自分を磨くための文章や社会批判の言葉、読者同士の語り合いを求めたのです。

当時、中卒者の就職先は農村や工場などでした。地域のボスが実権を握り、ブラックな働かせ方が横行する。中学で習った憲法の理念とは異なる社会の現実がそこにはありました。なぜ社会はこのようになっているのか。今はその理由が分からないけれど、そこにある自身の理解の欠落を認めたくえで多少でも埋めていこうとする作業を、読者たちはしていました。そこには「社会に格差があるがゆえに知的なものに触れようとしない」姿ではなく、「格差があるがゆえに知的なものに触れようとする」姿がありました。貪欲（どんよく）さと同時に謙虚さがあったものと私は見ます。

人生雑誌が読まれた時代は、進学率が上昇したことなどによって60年代には終わっていきました。以降、「大衆的な教養」の基盤は見えにくくなっています。いま、格差を問題視する議論は盛んですが、そこでも関心は実利的な「階層上昇」に集中しています。けれど、格差と教養が結びつく回路が完全に消えてしまったとは思えません。人生雑誌が青年を引きつけた理由の一つは、そこが「自分が興味を持っていること」以外のものに出会える場だったからでした。自分の中にある欠落が偶然の出会いによって埋められていくことへの喜びです。ネット検索の現代は、興味のあることだけに没入できる時代です。人々が知と触れあう場の中に偶然性をどれだけ埋め込めるか。それが「教養」の現代的な課題なのだと思います。

出典：「(耕論)「教養」はどこへ」『朝日新聞』2025年4月5日朝刊（文意を損ねない範囲で一部の文言を削除し、段落替えを減らした）

承諾番号：26-1091 朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。

以上

両面印刷